



安積の歴史シリーズI



第8回 中世 篠川公方の下向と安積伊東氏

柳田 和久 (やなぎだ かずひさ)

郡山市文化財保護審議会
委員



幕府と鎌倉公方の対立

足利尊氏は京都の室町に幕府を開き、鎌倉に鎌倉府を置いた。鎌倉府には尊氏の子基氏を派遣した。基氏は鎌倉公方と呼ばれ、以後基氏の子孫が世襲した。幕府と鎌倉公方は政策の違いから次第に対立を深めていった。

明德2年(1391)に、陸奥・出羽両国の管轄を幕府から鎌倉府に移したが、上杉禅秀の乱後、幕府が南奥の支配を強化したことから、鎌倉公方と

幕府との対立は一層深刻なものとなった。⁽¹⁾

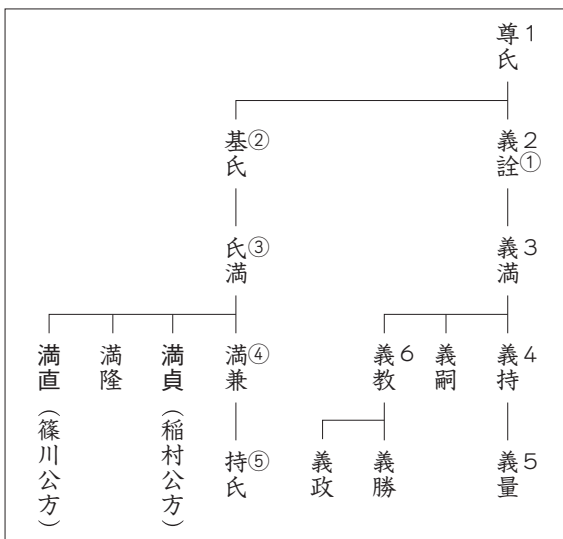
上杉禅秀の乱は、応永23年(1416)10月に起こった前関東管領上杉氏憲(禅秀)と鎌倉公方足利持氏との争いで、翌年1月10日に氏憲が敗れ鎌倉で自害した事件である。⁽²⁾

稲村公方の下向

応永6年(1399)7月、鎌倉公方足利満兼の命を受けた弟の満貞は、白河郡の結城氏、岩瀬郡の二階堂氏の支援をうけ、稲村(須賀川市稲村)に下向し奥州府を開設した。稲村は、岩瀬・白河・石川・田村・安積の5郡の境に位置し、将軍と結び反鎌倉府である菊田荘(いわき市)の藤井氏、田村庄司、会津の蘆名氏、及び伊達氏・斯波氏を牽制するのに格好の地であった。⁽³⁾ 満貞は稲村に居館を構えたことから稲村公方と呼ばれた。

篠川公方の下向

満貞の稲村下向は、奥羽の武士の掌握と奥州探題の権力を削ぐことであった。⁽³⁾ そのため、安積郡や田村荘のなかには満貞に敵対する武士もおり度々戦いを起している。応永12年(1405)5月14日には谷地で、同16年(1409)10月23日には安積郡の富岡城において、その間にも安積郡の福原城や田村荘の金屋城において合戦をしている。稲村



第1図 足利氏の略系譜

数字は公方(将軍)、○は鎌倉公方
新訂増補国史大系『尊卑分脈』、『国史大辞典』より作成

公方は安積郡や田村荘の武士に攻撃され、奥州府は危機に直面していた。⁽³⁾

この戦の最中、満直が篠川（郡山市笹川）に下向した。満直の下向は危機に直面していた満貞を支援するためである。⁽³⁾

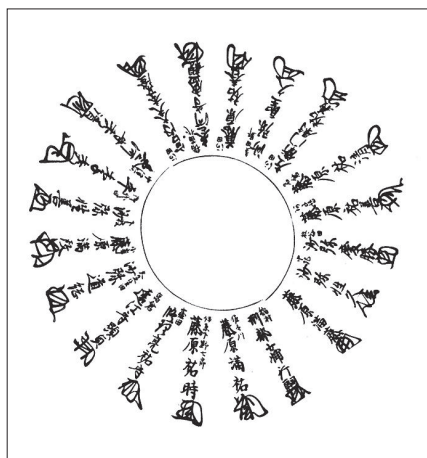
満直は篠川に居館を構え篠川公方と呼ばれた。篠川御所は稲村の前線にあたる北方に位置し、東は阿武隈川、北は笹原川が流れ防備に適した地であった。⁽³⁾

満直は、禅秀の乱当所は禅秀方だったが、乱中に幕府方（持氏方）となり、乱後は関東の支配権獲得の野望をいさきながら持氏に対抗していくのである。⁽⁴⁾

応永の国人一揆

応永11年（1404）、安積・田村・岩瀬郡の国人が一揆契状を結んだ。満貞に敵対する谷地・富岡・福原・金屋等の領主に対抗するためである。⁽⁵⁾ 国人とは在地の領主（武士）のことで、一村ないし数カ村を支配する村落領主である。

一揆契状は誰が筆頭人かわからないように円を描くように傘状に署名している。国人が、お互いに対等な立場で契約したことを示している。



第2図 傘連判状
（『郡山市史』1より転載）

一揆契状には、満貞・満直に忠勤をはげみ、互いに何ごとにも助けあうことが記載されている。また、それだけでなく大領主に対応しつつ、内部の紛争は自分達で処理することも盛られている。⁽⁶⁾

安積伊東一族を中心とする一揆

一揆契状は、安積伊東一族を中心とする一揆、田村一族を中心とする一揆、石河一族を中心とする一揆の3通が残されている。⁽⁶⁾

第1表は、安積伊東一族を中心とする一揆であ

第1表 安積伊東一族を中心とする一揆

結城古文書写	所在地	所属
猪苗代 参河守盛親	耶麻郡猪苗代町	蘆名氏
河田 藤兵衛祐春	郡山市逢瀬町河内	伊東氏
多田野 沙弥聖久	郡山市逢瀬町多田野	伊東氏
河田 左衛門尉祐義	郡山市三穂田町川田	伊東氏
名倉 藤原祐清	郡山市名倉	伊東氏
阿子嶋 藤原祐清	郡山市熱海町安子島	伊東氏
社谷田 沙弥勝慶	郡山市日和田町	伊東氏
中地 沙弥性久	郡山市湖南町中野	伊東氏
藤原満藤	不明	二階堂氏
稲村 刑部少輔行副	須賀川市稲村	二階堂氏
佐々川 藤原満祐	郡山市安積町笹川	伊東氏
伊東下野七郎藤原祐時	郡山	伊東氏
窪田 修理亮祐守	郡山市富久山町久保田	伊東氏
高倉 遠江守顕真	郡山市日和田町高倉	田村氏
大豆生田 沙弥通綱	郡山市大槻町	伊東氏
小峰 藤原満政	白河市	白川氏
下枝 沙弥性善	郡山市中田町下枝	田村氏
御代田 平季秀	郡山市田村町御代田	田村氏
中津河 参河守秀清	郡山市中田町中津川	田村氏
河田 宮内大夫季隆	郡山市田村町川曲	田村氏

る。20名が名を連ねているが、そのうち安積伊東一族は11名、田村一族は5名、二階堂一族は2名、蘆名一族と白川一族は1名ずつである。

一揆には、伊東一族の惣領と庶子が名を連ねている。安積伊東一族のなかに伊東下野七郎藤原祐時がいる。祐時の所在地は記載されていない。また、下野と国名を名乗っており特異な存在である。『郡山市史』は祐時の所在地を片平としているが、安積伊東一族の惣領と考えられることから郡山であると思われる。

田村一族を中心とする一揆

第2表は、田村一族を中心とする一揆である。

第2表 田村一族を中心とする一揆

秋田藩家蔵白川文書	所在地	所属
みよた 越前守宗秀	郡山市田村町御代田	田村氏
八田河 参河七郎秀高	郡山市田村町谷田川	田村氏
阿久津 沙弥覚祐	郡山市阿久津町	伊東氏
小沢 但馬守秀遠	田村郡船引町小沢	田村氏
墨田 信濃守季清	郡山市田村町細田	田村氏
鹿俣 沙弥清光	田村郡滝根町鹿又	田村氏
穴沢 宮内少輔秀朝	郡山市西田町三丁目	田村氏
白石 伊豆守季春	田村郡大越町白石	田村氏
門沢 沙弥得願	田村郡船引町門沢	田村氏
常葉 沙弥妙重	田村郡常葉町	田村氏
鬼生田 山城守秀遠	郡山市西田町鬼生田	田村氏
大越 宮内少輔季広	田村郡大越町	田村氏
下行合 出羽二郎季広	郡山市田村町下行合	田村氏

13名が署名しているが、そのうち田村一族は12名で、安積伊東一族は1名である。その1名が阿久津沙弥覚祐で田村一族に名を連ねている。

石河一族を中心とする一揆

第3表は、石河一族を中心とする一揆である。17名が署名しているが、そのうち石河一族は11名で、安積伊東一族は6名である。

安積伊東一族の守屋藤原祐国、片平沙弥慈本、富田藤原祐昌、早水藤原祐藤、神山沙弥祐金、前田河沙弥祐菊は、石河一族に名を連ねている。『郡山市史』は、前田河沙弥祐菊の所在地を須賀川市前田川、神山沙弥祐金の所在地を三春町熊耳としているが、郡山市喜久田町前田沢と郡山市水門町上野山とそれぞれ考えたい。上野山は、大正8年から昭和34年の阿武隈川の改修工事によって切り離されたが、当時は横塚と地続きで横塚の一分であった。

安積伊東一族中心の一揆は、安積伊東一族を中心に、田村・二階堂、蘆名・白川の一族が加わっている。また、田村一族中心の一揆と石河一族中心の一揆には安積伊東一族が加わっている。安積伊東氏・田村氏・石河氏・蘆名氏・白川氏等は、惣領による一族統制が崩れ、各地の庶流が村落領主として独立を強めていたと考えられる。

第3表 石河一族を中心とする一揆

秋田藩家蔵白川文書	所在地	所属
守屋 藤原祐国	岩瀬郡岩瀬村守屋	伊東氏
片平 沙弥慈本	郡山市片平町	伊東氏
富田 藤原祐昌	郡山市富田町	伊東氏
早水 藤原祐藤	郡山市昭和一丁目	伊東氏
八俣 沙弥長源	石川郡平田村	石川氏
神山 沙弥祐金	郡山市水門町上野山	伊東氏
田口 民部大輔光顕	東白川郡古殿町	石川氏
面川 掃部助光高	石川郡平田村	石川氏
中畠 上野介師光	西白河郡矢吹町中畑	石川氏
小貫 修理亮光顕	石川郡浅川町小貫	石川氏
炭釜 源貞光	石川郡玉川村須釜	石川氏
小高 源藤光	石川郡玉川村小高	石川氏
左近将監政光	不明	石川氏
松川 源朝光	東白川郡古殿町松川	石川氏
蒲田 長門守光重	東白川郡古殿町鎌田	石川氏
牧 源盛光	石川郡石川町牧	石川氏
前田河 沙弥祐菊	郡山市喜久田町前田沢	伊東氏

満貞・満直の死去

幕府と鎌倉府との対立は、永享の乱によって決定的となった。

永享の乱は、永享10年（1438）8月から翌年2月にかけて起きた鎌倉公方足利持氏と、関東管領上杉憲実の抗争である。憲実は持氏との不和から領国上野に退去したため、持氏は憲実を追って出陣した。憲実は幕府に援軍を求めたため、幕府は同年8月に関東・奥羽の諸氏に持氏の追討を命じた。憲実も越後・上野の兵を率いて攻め登り、持氏は翌年2月10日に居所永安寺において、稲村公方満貞と共に自害した。⁽⁷⁾

満貞は、持氏を援けるため応永31年（1424）11月に鎌倉に戻り永安寺に居住していたのである。⁽⁸⁾ 永享10年8月には、將軍義教は安積氏祐・田村遠江守・白川弾正少弼・二階堂遠江守・川俣飛弾入道・石河一族等の南奥の諸氏に、満直に従って上杉憲実を援軍するよう命じた。⁽⁸⁾ 満直は、後花園天皇の錦御旗を預かる将となっており、持氏・満貞を自害へと追い詰めた。⁽⁹⁾

永享12年（1440）3月、下総の結城氏朝が鎌倉公方足利持氏の遺子春王丸・安王丸を奉じて挙兵する結城合戦が起きた。翌嘉吉元年（1441）4月に結城城は落城し結城氏朝等は戦死した。春王丸・安王丸は捕らえられ京に送られる途中美濃の垂井で斬殺された。⁽¹⁰⁾

満直は、蘆名・白川氏等に結城城を攻めるよう命じるが、満直は結城合戦の最中の7月に、安積氏祐・石河持光・畠山盛宗等に攻め殺された。⁽¹¹⁾

註

- (1) 『郡山市史』 1
- (2) 吉川弘文館『国史大辞典』、平凡社『日本史大事典』
- (3) 高橋明「稲村殿満貞と篠川殿満直」（『福大史学』第82号）
- (4) 註 1
- (5) 平成26年度発行『郡山の歴史』
- (6) 『郡山市史』 1・8
- (7) 註 2
- (8) 『郡山市史』 1・8
- (9) 註 5
- (10) 註 2
- (11) 註 3・註 5